

社会科

当該学年の目標及び内容・進度での学習が難しい子どもへの

社会科の指導

The Study of Social Studies Teaching for Students Showing Difficulty in
Learning in Their Grade's Objectives and Contents

目 次

I. 本研究の目的	6 4
II. 地理的分野における検討	6 4
III. 事例報告 1	6 8
IV. 事例報告 2	7 4
V. 歴史的分野における検討	7 9
VI. 今後の展望と課題	7 9

I. 本研究の目的

本研究は、『学習に遅れがある肢体不自由児に対する各教科の指導内容の精選・重点化，指導の工夫に関する研究』（平成26・27年度文部科学省特別支援教育に関する実践研究充実事業）における研究内容を引き継いでおこなうものである。肢体不自由児の中には，社会科の学習において，資料から必要な情報を読み取ることが苦手，複数の情報を関連付けたりまとめたりすることが苦手，といった学習上のつまずきを示し，当該学年の目標・内容での学習を進めていくことが難しい子どもがいる。このような子どもが教科の基礎的・基本的な内容を着実に身に付けるためには，桐が丘L字型構造の横軸にあたる障害特性や学びの実態を踏まえるとともに，桐が丘L字型構造の縦軸にあたる教科の特質や系統性をおさえ，個に応じた指導目標・指導内容の設定や手立て，配慮をおこなう必要がある。そこで，地理的分野における目標・内容を整理した系統図を作成し，指導の重点化の考え方に基づいた授業実践を通して，系統図の活用の仕方や重点化の手続きの検証をおこなってきた。また，歴史的分野においても同様に目標・内容の系統性を整理する必要があると考え，本研究をおこなうこととした。

（文責：小林 博信）

II. 地理的分野における検討

1. これまでの研究成果

平成26・27年度の研究では，地理的分野に焦点化して系統性を整理した。地理的分野は地図，グラフ，表，写真資料などの視覚的な資料が多く使われることから，他の分野に比べて視覚的な情報処理が苦手な子どもの学習上の難しさが特にあらわれやすい。小学校及び中学校学習指導要領解説や教師用指導書等の文献に示されている地理的分野における目標・内容をカード化し，肢体不自由児の学習の特性を踏まえて，系統性を整理した。その際，図1及び図2の横軸にあたる「社会的事象を捉える思考の深まり」と図1及び図2の縦軸にあたる「社会的視野の広がり」の2軸を設定し整理した。「社会的事象を捉える思考の深まり」とは，社会的事象をどのようにして捉えていくかという思考の方法を指すものである。この軸を構成する思考方法として，資料などから事実を読み取る「事象」，複数の地域や事象を比べ，共通点や違いを捉える「比較」，複数の事象の関連性を捉える「関連」，地域の特色を総合的に捉える「特色」，学習したことを活用して地域の課題の解決に向けて考える「社会参画」があると考えた。「社会的視野の広がり」とは，扱う地域や事象の段階性を示すものである。子どもにとって身近な地域・具体的な事象から，抽象的な地域・事象へと段階的に広がっていく順序で整理した。特に1つ目の軸である「社会的事象を捉える思考の深まり」の力を育てていくことが，子どもの「社会的な見方・考え方」を育てるために重要であると考えた。また，指導内容系統図は指導内容の順序性を示すものではなく，それぞれの指導内容を行き来したり，実態に合わせてその順序を入れかえたりしながら，指導を進めていくことができる構造であることが確認された。

これらの研究を踏まえて，子どもが適切に思考力を培うことに重点化した授業実践を積み重ね，検証していくことが課題として挙げられた。

2. 「地理的分野における指導内容系統図」を用いた授業実践・検証

指導内容系統図の「社会的事象を捉える思考の深まり」の軸を生かした指導について，実践を踏まえ

て検証をおこなった。授業を実践するにあたっては、①実態把握、②指導目標・指導内容の設定、③指導の工夫、④評価の4つのプロセスで指導をおこない、それぞれ検証した。実態把握では、系統図（図1及び図2）の「社会的事象を捉える思考の深まり」の軸を用いて、それまでの子どもの学びからどの思考の力がどの程度培われているかを捉える指標とすることができた。指導目標・指導内容の設定では、「社会的事象を捉える思考の深まり」の軸にそった実態把握にもとづいて、指導目標を設定することが可能となった。また、重点化した指導目標を達成できる地域や事象を選定し、指導内容を設定した。指導の工夫では、比較や関連といった思考の力をどのように育てていくのかという視点を持ち、授業の組み立てにつなげることができた。具体的には、適切な年間指導計画の作成づくりや、日々の授業での子どもとの関わり方、使用する教材の選定において根拠を明確にしておこなうことが可能となった。評価では、子どもの読み取りや発言を系統図（図1及び図2）の「社会的事象を捉える思考の深まり」の軸から分析することができ、指導目標で設定した思考の力がどの程度身に付いたのかを評価することができた。結果として、次の指導目標・指導内容の設定につなげることができ、指導と評価の一体化につながった。

次章では、これら4つのプロセスを踏まえた中学部・高等部の2つの実践事例を紹介する。

（文責：小林 博信）

地理的分野における指導内容系統図 (No. 2)

日本の様々な地域

- 歴史に関する特色ある事柄を中核として、それを国以外の他地域との結びつきや自然環境などと関連付ける
- 地域の環境問題や環境保全の取り組みを産業や地域開発の動向、人々の生活などと関連付ける
- 産業に関する特色ある事象を中核として、地理的諸条件と関連付ける (地域の農業や工業)
- 地域の伝統的な生活・文化に関する事象を自然環境や歴史的背景、他地域との交流などと関連付ける
- 地域の交通・通信網に関する事象を物資や人々の移動の特色や変化などと関連付ける
- 自然環境に関する特色ある事象を中核として、人々の生活や産業などと関連付ける (地域の地形や気候など)

身近な地域の課題を見だし、地域社会の形成に参画しその発展に努力しようとする態度を身に付ける

日本の地域区分 (都道府県の名称・位置・県庁所在地名) が分かる

世界各地との時差が分かる

我が国の海洋国家としての特色が分かる

領域の特色 (動土・気候・地形) が分かる

わが国の国土上の位置がとらえることができる

州 (アジア、ヨーロッパ、アフリカ、北アメリカ、南アメリカ、オセアニア) ごとに様々な面から地域的特色 (自然、産業、生活・文化、歴史的背景など) を大観することができる

世界の地理的事象を位置や環境条件、人間の営みなどと関連付けて考察することができる

世界の人々の生活や環境の多様性を理解し、なぜそのような生活がそれぞれの地域で営まれているのかを考える

我が国との比較や関連を図ることができる

社会的に広がる宗教 (仏教、キリスト教、イスラム教) の分布について分布図を用いて大まかに把握することができる

同じ地域でも宗教その他の社会的条件による生活の違いがみられることに着目できる

宗教とかかわりの深い生活が営まれていることに着目することができる

特色のある自然環境 (暑い地域と寒い地域、山岳地域と沿岸地域など) とそれに関係する衣食住を、写真や映像資料などを用いてとらえることができる

同じ地域の過去と現在の生活を比較してその変化に着目し、人々の生活が可変的なものであることに気付くことができる

世界各地の人々の生活の様子を自然及び社会的条件と関連付けて考察することができる

人々の生活の工夫や、伝統的生活と現代の変化をとらえることができる

同じような自然条件の地域の共通点や地域によって異なる点を探することができる

地球上の位置を緯度・経度を用いて表すことができる

地球上の大まかなとらえ方 (赤道・北極点・南極、北半球・南半球の位置を知る、日本の位置点を探するなど) が分かる

大まかに世界地図を描くことができる

世界を様々な地域 (州、地域) に区分けしてとらえることができる

六大陸と二大洋の大まかな形状と位置関係をとらえることができる

主な国々 (面積の広い国、人口の多い国、日本とかかわりの深い国、ニュースで頻りに取り上げられる国など) の名称と位置が分かる

社会的視野の広がり

世界の様々な地域

比較 関連 特色 社会参画

社会的な事象をとらえる思考の深まり

図2 地理的分野における指導内容系統図 (No.2)

Ⅲ. 事例報告1

1. 単元名

日本の諸地域「東北地方」～東北の祭りを調べよう～

中学校学習指導要領上の位置づけ：(2) 日本の様々な地域 ウ 日本の諸地域 (カ) 生活・文化を中核とした考察

2. 対象児童生徒について

(1) 対象生徒

本校中学部第2学年（下学年や下学部の各教科の目標・内容により編成する教育課程）の男子生徒A（脳性まひ）。

このコースでは2名（平成28年度）の生徒が学習している。社会科のみならず他の教科でも抽象的な思考や複合的な処理に配慮を要する生徒であり、下学年での目標・内容を適用し学習を進めている。

(2) 個別の指導計画の指導方針

① 生徒の実態

- ・体幹が保持しにくく、左に傾きやすい。姿勢が崩れたことに気付きにくい。
- ・書字に時間を要する。
- ・構音にやや不明瞭な部分があり、舌の使い方・呼吸に課題がある。
- ・抽象概念化が難しく、また複数のことを同時に処理することが苦手である。
- ・視覚認知に難しさがある。

② 手立て・配慮

- ・姿勢が崩れたときに声かけを行い、座り直しを促す。
- ・書字の量に配慮する。
- ・ゆっくりと発音できるよう、ゆとりを持った問いかけを行う。
- ・キーワードや資料提示を順序化し、関連付けのポイントを明示する。本人に分かる具体化・イメージ化し、考える手順を示す。
- ・図やグラフは複数の要素をなるべく盛り込まないようにする。なるべく色で識別できるように、カラーの図表も提示する。

(3) 社会科の実態

社会科の授業において対象生徒には以下のような様子が見られた。

- ・ページをめくる、資料を替えるなどの作業が難しい。
- ・言葉からイメージすることに難しさがある。
- ・多すぎる手順や指示に混乱することがある。
- ・単純な資料を用いて比較はできるが、それを用いて関連付けなどまとめて捉えることが難しい。
- ・関連付ける作業において思考の過程などを説明することが得意ではない。
- ・形を捉えることが難しいが、地図を描くときは○などの大まかな図形を用いて表せる。

また当校の社会科では目標や内容を記した「地理的分野における指導内容系統図」(以下「系統図」)を作成している。「社会的視野の広がり」を縦軸に、「社会的事象を捉える思考の深まり」を横軸に設定している。「社会的視野の広がり」では小学部段階の身近な地域から市町村・都道府県・日本全体から世界へと広がっていき、中学部段階での主な学習は、日本や世界の諸地域のテーマ学習が中心となってくる。(図3参照)

社会科の生徒たちの実態を「系統図」と照らし合わせると、図3のNo.2(太枠部)「日本の諸地域」の学習では地域の伝統的な生活・文化に関する事象を自然環境や歴史的背景、他地域との交流と関連付けながらその地方の特色を身に付けることとされている。世界の諸地域を取り上げた時(筑波大学附属桐が丘特別支援学校, 2016参照)と比べ、取り扱うべき内容は地域的な特徴のある事柄で、多くの事象を捉えたのちに「比較」・「関連付け」を行わなければならないため、思考を深めるためには取り扱う事象を厳選する必要があると考えた。「比較する」「関連付ける」力を着実に育てていくために、生徒の付けるべき思考の力は小学校高学年と捉え、図3のNo.1(太枠部)での学習内容を取り扱う視点を用いて事象を厳選している。

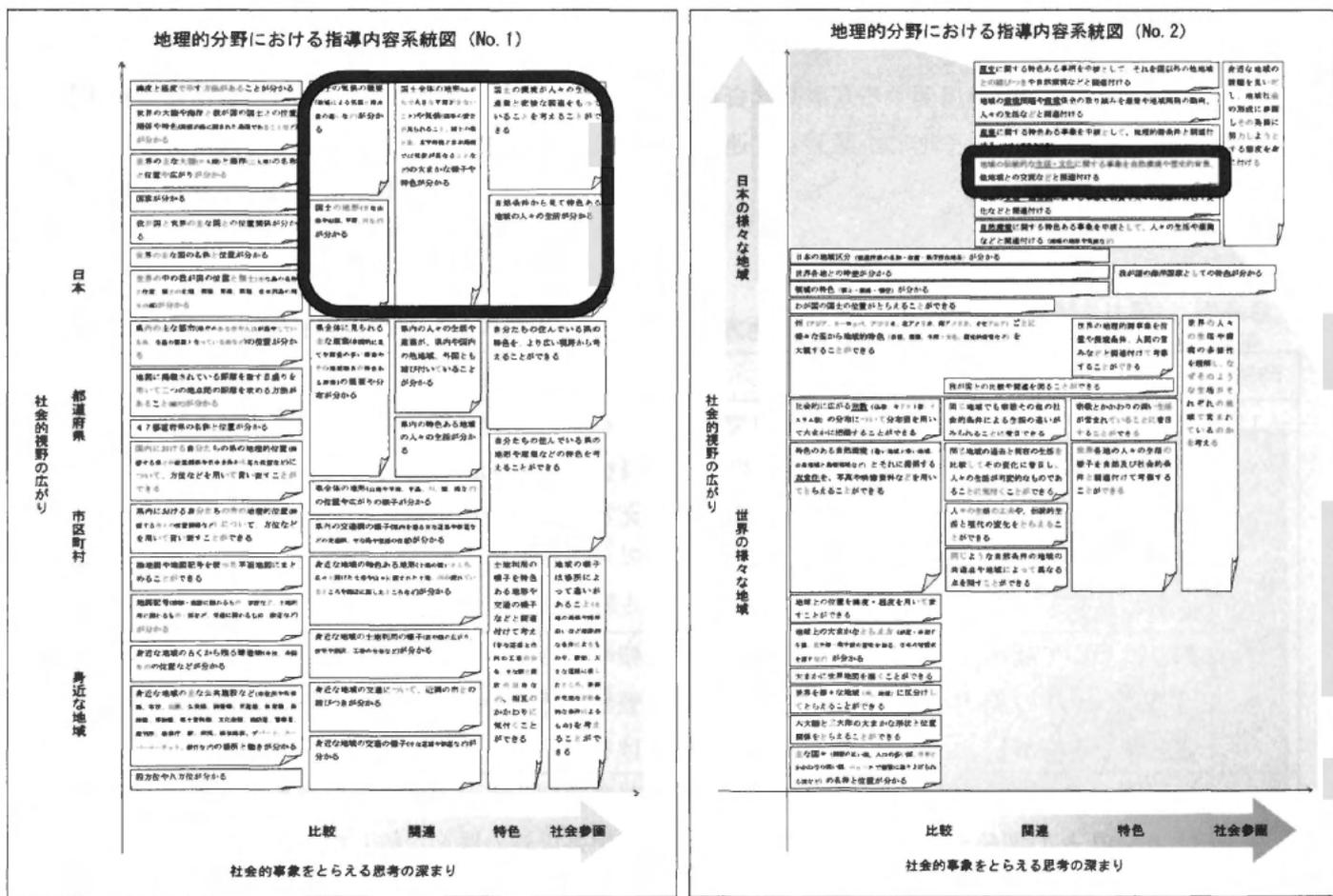


図3 『社会科地理的分野における指導内容系統図 (No. 1, No. 2)』と対象生徒Aの実態把握

3. 本単元の指導について

(1) 単元の指導目標と評価規準

① 単元の指導目標

- ・東北地方の地域の「祭り」を取り上げ、伝統的な民俗行事の資料を通して、東北地方の生活文化に関心を持つことができるようにする。
- ・東北地方の「祭り」を通して自然環境を中心に歴史的背景・産業などの視点からこの土地に暮らす人々の生活や文化を考察することができるようにする。

② 単元の評価規準

- ・東北地方の地域的特色に関する関心を高め、意欲的に追究し、捉えようとしている。
【社会的事象への関心・意欲・態度】
- ・東北地方で祭りが盛んなことについて、米作りなどの産業が自然環境と密接にかかわりを持ち、それが祭りとして根付いていること、また現在では観光客を引き付ける伝統行事としての役割を担っていることなどを、積極的に関連付けて考察し、それを表現している。
【社会的な思考・判断・表現】
- ・東北地方の地域的特色に関する基礎的な資料を効果的に活用している。
【資料活用の技能】
- ・東北地方の祭りと気候や地形が産業と関連していることを捉え、それを特色として理解している。
【社会的事象についての知識・理解】

(2) 単元の指導計画

表1 「日本の諸地域(東北地方)～東北の祭りを調べよう～」の指導計画

時間	学習内容	学習活動
1	東北地方ではなぜ祭り(チャグチャグ馬コ祭り)がさかんなのか? 【事象の関係を読み、仮説をたてる】	東北地方で行われている伝統的な祭りの映像(音声無し)を見て「どのような祭りか」を捉え、「どんな思いが込められた祭りか」自分の考える仮説を表現する。
2	祭りについて調べよう 【東北地方の祭りに興味・関心を持つ】	「どこで行われる祭りなのか」「いつから始まったのか」「どうして祭りに馬が登場するのか」などを調べることで、基本的な知識を身に付ける。
3 4 5	岩手県に暮らす人々の生活と祭りとの関係を見てみよう 【事象を関連付けて要因を捉える】	岩手県に関する資料や地図・表などから自然環境や歴史的背景・産業の特色を岩手県以外の県と比較しながら捉える。
6	東北地方の祭りを通じて地域的特色を捉える 【考察と表現】	これまでの考察を基に、東北地方の特色を捉える。現在祭りを存続させるためにどのような取り組みをしているかを知り、地域的な課題について考える。

(3)指導及び教材の工夫

①系統図の作成

当校の社会科では目標や内容を記した「地理的分野における指導内容系統図」を作成しており、生徒の実態に応じてどこにポイントを置いて指導するかを捉えやすいようにしている。

②「比較」「関連」を意識した授業

下学年・下学部適用コースで学ぶ生徒に対し、小学校段階の系統性と障害特性を踏まえ、提示する資料を厳選している。そして基礎的な資料をもとに比較したり、関連付けたりして考えたことを表現することを目指している。また生徒の実態を鑑み、思考が深められるよう以下のような点で手立て・配慮を行った。

- ・指示や手順はシンプルに行う。祭りに関する映像は音声を消し、視覚的に捉えた情報にしばって捉えさせる。
- ・資料はパソコン上で比較できるようにし、見たいところを拡大したり、重ねたりが自由にできるようにする。
- ・生徒たちが比較して捉えた内容はキーワード化したり、言葉を補ったりして提示する。
- ・事象同士が関連付けしやすいように、捉えたキーワードをマグネットシールに貼り、操作しながら考えられるようにする。



図4 パソコンを使って資料を比較し、読み取ったことをワークシートに記入している様子

(4)評価について

①学習の経過

対象生徒は、「チャグチャグ馬コ」祭りについてどんな思いが込められているか仮説をたてたところ、「馬は昔から人間に愛されていたのではないか」「馬を神様として子どもを乗せて、いい子に安全に育つように神様（馬）に願う祭り」と述べ、馬と子どもとの関係に注目して祭りを捉えていた。

他にも映像から東北地方の自然の美しさや街並みについて発言し、「ゆったりとした生活なんだろうな」「いいなあ」と感じたことを率直に発言していた。

第2時以降は「この祭りがどこで行われているのか」

「いつから行われているのか」など祭りの歴史や基本的な情報を収集したり、岩手県の伝統的な家屋をみて人々の生活と馬との関係を捉えたりする中で「農業を手伝ってもらう馬がいて、その馬と住んでいた」こと、「農耕に使われる馬への感謝の祭りであること」を読み取り、この土地の人々の特徴的な生活とこの祭りへの人々の思いが歴史的に培われてきたこと、そして祭りへの思いが現在につながっているということを知ることができた。



図5 読み取った内容をカード化し、動かしたり、結びつけたりすることで関連付けられるものを探している様子

「なぜ馬と一緒に暮らしていたのか」については地形や気候からその理由を読み取ってほしいため、東北地方と既習である関東地方の地形や秋田県とを比べることで、また気候については東北地方の日本海側と太平洋側の特徴を表わす雨温図や降雪量の違いを表わした図表を提示することで比較して特徴を捉えさせた。東北地方の地形は「関東地方に比べて平地が少ないこと」「岩手は秋田に比べて特に山がちであり、平地が少ない」ということを読み取ることができた。気候に関しては「東京と比べて、平均気温が低く、特に冬場の気温はとても低い」「岩手は秋田と比べて気温が低く、降水量が少ない」「秋田も岩手も豪雪地帯だが、秋田の方がよりたくさん降る地域がある」「岩手では夏の季節風の影響で、天気が悪く、気温が上がらないことから農作物へ影響が出る時もある」など、東北ならではの地形や気候の特色をつかみ、山がちな地形であり、さらに厳しい冬の季節を過ごす人々の生活について、資料から読み取ることができた。



図6 生徒が行った関連付けの様子

また岩手の産業を見てみると、東北地方の中では米の生産量は低いものの畜産や園芸農業など、農業生産額は全国で11位であり耕地面積は全国で5位という農業資源に恵まれた県であることが分かる。生徒は岩手県が農業生産額に占める畜産や野菜の割合が秋田に比べて高いところを読み取っていた。資料を厳選しているため、なぜ畜産や野菜の割合が高いのか、地形などと結び付けられる資料は提示していないが、生徒たちの「なぜだろう」から、今後徐々にいろいろな資料で地域の特色を深く捉えていけるように指導したいと考えている。

②学習の評価

この授業の評価として地形や気候を調べてわかったことを教員が抜き出し、それぞれをカードにして操作しやすくマグネットを貼り、ホワイトボード上で操作できるようにした。たくさんのカードから関連付けられそうなカードはホワイトボード上に置くようにし、さらに明確に結び付けられるものは、マジックで矢印をつけるように指示した。生徒は図6のように、「東北地方ではなぜ祭りが盛んなのか」について、最後のまとめの授業で「農業を手伝ってもらった馬がいて、その馬と住んでいる事」が「農耕馬（農業に使われる馬）に感謝する」祭りにつながっていることを関連付けることができた。地形と農業に関するつながりは「関連付けられそうだけど、どうかな…」と迷いながら、ボード上に置くことができていた。また気候に関することも、秋田と岩手では同じ東北でも平均気温が異なることを表わすカードをボードに置くことができていた。

仮説で述べたこととは異なる視点でこの祭りを捉えることができ、比較して捉えた事実を結び付けようとしていたことは、今後の学習に活かせるのではないかと感じている。

4. 単元の指導を振り返って

本単元では、図3の系統図を活用し、社会科の目標及び「社会的な思考の深まり」から指導目標を定めることで指導を進めてきた。どのような方法で思考を深めていけば生徒の力として身に付くのか、そし

て生徒から出てきた「なぜ」を自分自身の力で掘り下げていく方法を身に付けさせるにはどうしたらいいかを考えることが重要であると感じている。

今回の授業では、もう1人の生徒が同じ東北地方の祭りである「秋田竿燈祭り」を取り上げて学習している。そのため、地域が異なる二つの祭りを最後に紹介するという形を取りながら、お互いに発表を行った。岩手に比べ、農業生産額の多くを米が占める秋田県で行われる「竿燈祭り」に込めた人々の思いは、「チャグチャグ馬コ」祭りとは行われている地域も祭りの様子も異なるが、どちらも厳しい自然環境で暮らす人々の生活と結びついていることに気付くことができた。本時の最後に「この2つの祭りの共通点は？」の問いかけに本事例の対象生徒が、「祭りにはその土地に住む人の思いが込められている」と述べていたことは、今後他の祭りを生徒が見た時に、同じように汎用化してその土地の風土を捉えることができる大切な力になるのではないかと感じた。

これまで中学生段階に求められる「社会的視野の広がり」を重視しつつ、生徒の実態を鑑みた上で、「社会的事象を捉える思考」がどこまでついているのかを問いながら日々の授業実践をおこなってきた。当該学年の学習が難しい対象生徒にとっては、「日本の諸地域」は「世界の諸地域」を取り上げた時に比べ、身近で見聞きしている事柄が多い場所である。しかし、中学校の学習指導要領に盛り込まれた「日本の諸地域では地域的特色を捉えるために他の事象と有機的に関連付ける」ために、「自然の特色」「産業の特色」などの項目をたくさん取り上げようとすると、学習指導要領の指摘する「網羅的、並列的」な学習になり、生徒の実態からはかけ離れた授業になってしまう。そのため本時も含め対象生徒の実態に鑑み、障害特性を踏まえ、生徒に提示する資料も精選し、より読み取りやすいものを提示している。将来的に自分で課題を見つけ、自分で資料を用いて解決できる力を身に付けるために、自分で比較したり、関連付けたりする経験を積み重ねることが重要であると感じている。今後も生徒たちの社会的な視野を広げつつ、思考を深めて行けるよう日々の実践を大事にしていきたいと考えている。

参考文献

- 1) 文部科学省 (2008). 小学校学習指導要領解説, 社会編.
- 2) 文部科学省 (2008). 中学校学習指導要領解説, 社会編
- 3) 澤井陽介 (2013). 小学校社会授業を変える5つのフォーカスー「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎」を培うために. 図書文化社
- 4) 梅澤真一編著 (2010). 活用力の基礎をはぐくむ授業ベーシックー「必備 社会科の定番授業小学校4年」. 学事出版
- 5) 辻原康夫監修 (2016). 小学館キッズペディア 日本と世界の祭り. 小学館
- 6) 日本の祭り編集室 (2015). 日本の祭りー北海道・東北編ー. 理論社
- 7) 筑波大学附属桐が丘特別支援学校 (編) (2016). 平成26・27年度 文部科学省 特別支援教育に関する実践研究充実事業 研究成果報告書 特別支援教育に関する教育課程の編成等についての実践研究 学習に遅れがある肢体不自由児に対する各教科の指導内容の精選・重点化, 指導の工夫に関する研究. 筑波大学附属桐が丘特別支援学校研究紀要, 51. 筑波大学附属桐が丘特別支援学校

(文責: 新 洋子)

IV. 事例報告2

1. 単元名

「このままでいいの？日本の食」

地理A (1) 現代世界の特色と諸課題の地理的考察 ウ 地球的課題の地理的考察

2. 対象児童生徒について

(1) 対象生徒

本校高等部第1学年（下学年や下学部の各教科の目標・内容により編成する教育課程）の男子生徒1名（脳性まひ）。

学習集団は、対象生徒Aを含む男子生徒2名と女子生徒1名の計3名からなる。いずれも学習意欲の高い生徒たちで、活発に意見を交換し合いながら学習に取り組んでいる。

(2) 個別の指導計画の指導方針

① 生徒の実態

- ・ 学習時の姿勢は左に傾きやすい。
- ・ 書字に時間を要する。
- ・ 視覚認知の困難さがある。
- ・ 複数の事を同時に処理することに難しさがみられる。
- ・ 言葉の意味を正確に捉えたり、概念を理解することが難しい。
- ・ 自分の考えをまとめることに難しさがみられる。

② 手立て・配慮

- ・ 授業開始時や姿勢が崩れた時などには、適宜声かけを行い、座り直しを促す。
- ・ ICT機器を活用し、書字量の軽減を図る。
- ・ 情報を制限するなど見やすい教材の提示を行う。
- ・ 指示や資料の提示は継次的に行う。
- ・ 用語の意味を理解しているかを確認する。

(3) 社会科の実態

社会科（地理歴史科・地理A）の実態としては、以下のとおりである。

- ・ 視覚認知の困難さがあり、地図や図表の読み取りが苦手である。
- ・ 図表の読み取りでは、「日本と比べて多い（少ない）」など、単純な「比較」はできる。
- ・ 読み取った内容を複数結び付けて「関連」させたり、「特色」を捉えたりすることは難しい。
- ・ 用語として覚えているものは多いが、その実質の理解ができていない部分がある。

また、「地理的分野における社会科指導内容系統図」において対象生徒Aの「社会的事象を捉える思考の深まり」の力及び「社会的視野の広がり」の実態を捉え、指導目標及び指導内容を設定した。思考の力の実態としては、前述の通り当該学年相当には至らず、あくまでも「小学校中学年～高学年」程度であると分析した。よって、指導目標を図7の系統図 No.1 上に示した「社会的事象を捉える思考の深ま

り」の太枠の段階にあたる「比較」「関連」の力の育成とした。しかしながら、対象生徒Aは旅行や食文化に関心が強く、知らない世界の事象を扱うことで得られる学びも多いと考えた。よって指導内容としては図7系統図 No.2 上の「社会的視野の広がり」の太枠の段階にあたる地域・事象を扱うこととした。

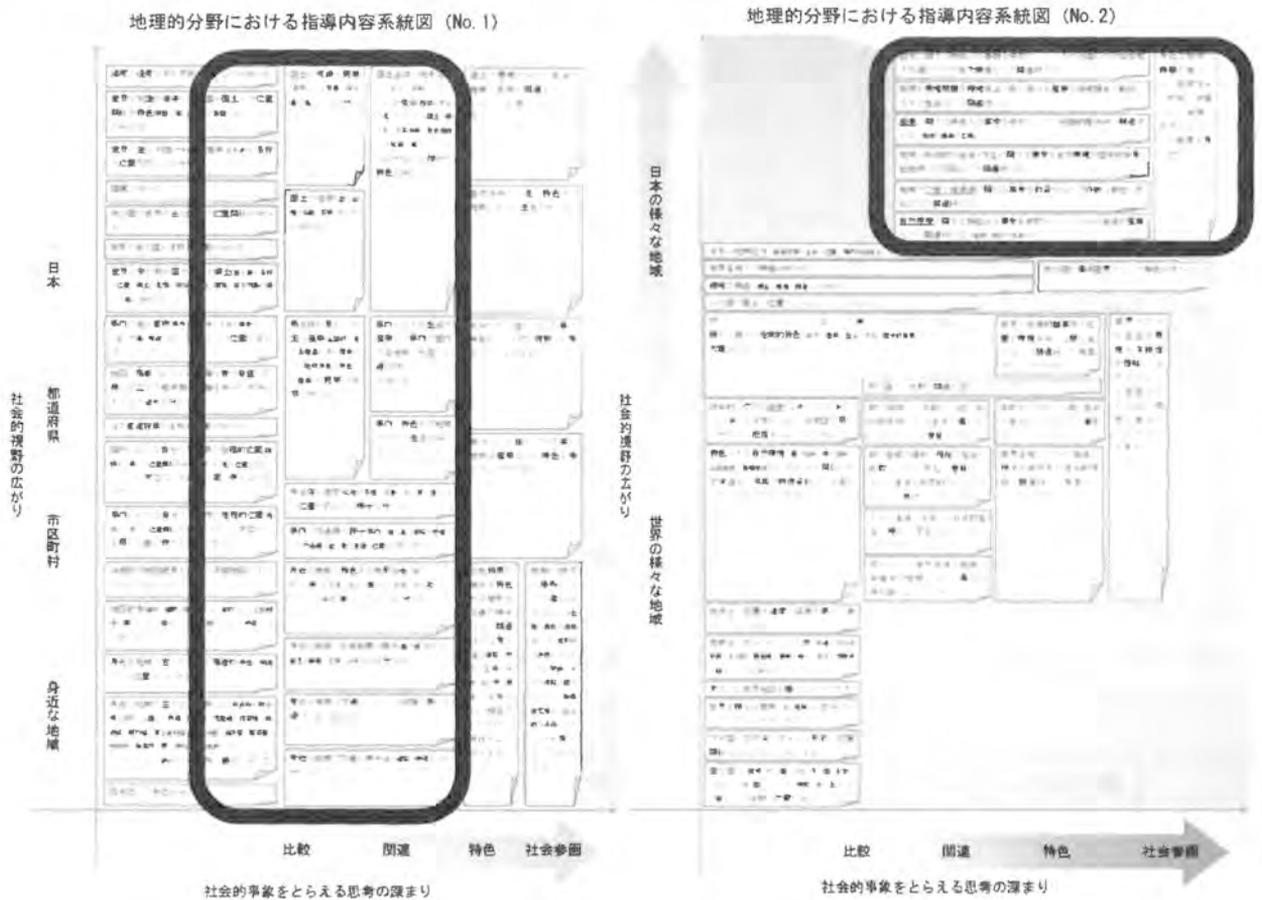


図7 『社会科地理的分野における指導内容系統図 (No. 1, No. 2)』と対象生徒Aの実態把握

3. 本単元の指導について

(1)単元の指導目標と評価規準

①単元の指導目標

地球的課題の地理的考察（食料問題）について、地図や統計などの基礎的資料を活用して調べ、それらを多面的・多角的に捉え、根拠に基づいた意見を述べることができるようにする。

②単元の評価規準

- ・我が国の食料輸入及び世界の食料問題について考察する学習活動を通じて、食料問題に対する関心を高め、意欲的に追究し捉えようとしている。【社会的事象への関心・意欲・態度】
- ・我が国の食料輸入及び世界の食料問題について、環境問題や人口問題などの複数の事象と関連付けて、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。【社会的な思考・判断・表現】
- ・我が国の食料輸入及び世界の食料問題について、基礎的な資料から読み取り、有用な情報を選択している。【資料活用の技能】
- ・我が国の食料輸入及び世界の食料問題について、相互の関連を理解し、その知識を身に付けている。【社会事象についての知識・理解】

(2)単元の指導計画

表2 「このままでいいの？日本の食」の指導計画

時間	学習内容	学習活動
1～2	<ul style="list-style-type: none"> ●「食べ物はどこからきたの？」 ●「食料輸入の良い点、悪い点はなにか？（予想）」 	<ul style="list-style-type: none"> ・冬休みの課題（食品の産出国調査）の共有 ・それぞれの食材の自給率を統計資料から調べ、多くの食材（種子を含む）がどこからきているのかについて調べる ・日本の食料自給率が40%であること、食生活の変化が自給率に影響していること、海外の食材が入ってこないとどのような食事になるかを知る ・仮説を立てたうえでの立場の表明
3～6	<ul style="list-style-type: none"> ●「輸入を控える必要があるか、ないか」(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の立場を様々な視点から裏付けできるように、資料を探し、読み取り内容を情報カードに記入する <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> ①環境（世界的な農地の減少，バーチャルウォーター，フードマイレージ，農産物輸出規制の現状，気象の影響，伝染病や食品偽装問題…11種） ②食生活（肉食化，飼料価格の高騰，食料廃棄，穀物消費のアンバランス…10種） ③農業（人口増にともなう食料需要の増加，大規模農業，開発輸入，割安な農産物…9種） </div>
7～9	<ul style="list-style-type: none"> ●「輸入を控える必要があるか、ないか」(2) 	<ul style="list-style-type: none"> ・カード化した情報から立場を説明するために必要なものを取捨選択する ・選択した情報カードをもとに関連図を作成し、自分の意見をまとめる ・それぞれの意見を発表し、意見交換を行う
10	<ul style="list-style-type: none"> ●「このままでいいの？日本の食」 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本が抱える食料問題についてまとめる ・実際に行われている政策を知る

(3) 指導及び教材の工夫

指導及び教材の工夫として以下の3点を行った。

- ・扱う地域を考慮した年間計画の作成
- ・個人で読み取る作業時間の確保，理解状況の言語化
- ・思考を整理するための教材教具の導入

地理的な見方や考え方を培うためには、複数の地域を扱う中で反復的に学習を重ねることが重要である。そのため、年間計画を立てる際には、中心に扱う地域を考慮し、既習内容との関連性を意図的に持たせる工夫を行った。また、資料の読み取りや思考整理の手法も学習の中で繰り返し行えるようにした。

次に、対象生徒Aがどの程度の読み取りができるかを把握するために、個人作業の時間を設け、ワークシートに自分の言葉で表現させた。本人に記述させることで、自分の力でどのような読み取りをしたのかを評価できるようにした。作業中に対象生徒Aの手が止まっている場合には、前述の手立て・配慮等を踏まえ、理解状況を言語化させることで、思考を促した。

そして、事象を関連付ける際には、生徒自身が読み取った情報を「情報カード（以下、カード）」として提示した。生徒に、1枚ずつカードの内容を確認させ、該当する箱（今回は「必要ある」「必要ない」「保留」「不使用」の4つ）に分類させた。その上で、「必要がある」「必要がない」にそれぞれ分類した

カードを関連付けていくように指導した。このように情報の整理がしやすくなるよう配慮を行った（図8・図9）。



図8 情報カードを分類した様子

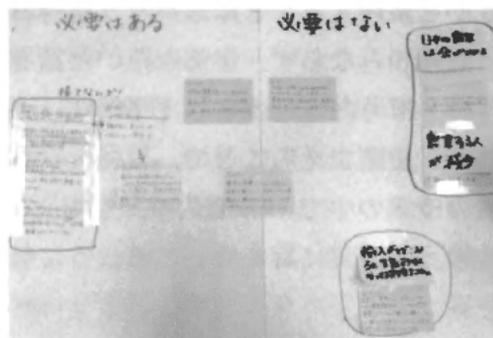


図9 分類した情報を関連付けしてまとめた様子

(4) 評価について

① 学習の経過

日本の食料自給率に関する現状を学習した後、教師が用意した資料集を用い、自身の主張を支える根拠となる情報を資料から読み取った。対象生徒Aは、我が国は「輸入を控える必要はない」という立場を選択した。読み取りの内容からは、自分なりの言葉で適切に事象を捉えている様子がみられた（図10）。

情報を整理する際には、自身の読み取りを根拠にすることで、自信を持って意見を述べる様子がみられた。なお対象生徒Aは検討の結果、当初の意見立場を変更し、その理由も踏まえ意見を論じることができた。

③-3 ふえた農産物の輸入

アメリカやオーストラリアでは、広い農地で機械化が進んだ農業をしています。そのため、農作業にかかるコストが低く、農作物の値段も安くになります。また中国などでは人件費が安いので、低いコストで農作物を作ることができます。それらの作物は日本で安く売られ、農作物の値段は安い状態が続いています。

一方、日本では、低いコストで農作物を作ろうにも、農地の面積が少ないため、無理があります。しかも農地を広げるのにも、機械を買うのにもお金がかかります。したがって、農作物を作るコストを下げるために、農家は借金をしなければならないという問題がおきています。

※主要国の国民1人当たり農地面積の比較
11年：2019年、12年：2018年、13年：農林水産省の資料より作成

国	農地面積 (アール)
オーストラリア	2208.5
カナダ	213.6
米国	143.4
フランス	49.6
米国	28.4
ドイツ	20.8
日本	3.7

- 日本は、アメリカやオーストラリアなどと比べて、農地を広げたり、機械を買ったりするのもお金がかかる。
- 日本は、農作物を作るためのコストを下げるには、借金をしなければならない。

図10 資料の一例と対象生徒Aの読み取り内容

② 学習の評価

対象生徒Aは、「最初は不作が心配なため輸入を控える必要はないと思った。しかし、日本は食品ロスが多く、促成栽培など高コストな農業をしている。その部分を食料が不足している国の支援に回すべきだと思う。だから、日本はちょっと輸入を控えるべきだ。」とまとめた。社会的な思考・判断・表現の評価として、食料の偏りやエネルギーコストの問題という複数の視点で関連付けて考察することができたと判断した。今後も指導の工夫を継続して行い、より多角的・多面的に社会的事象を捉える力を育てていくことが必要であると評価した。

4. 単元の指導を振り返って

社会科として育てたい力を「社会的事象を捉える思考の深まり」と整理することが、何をどのように指導すべきかを整理することに繋がり、指導目標及び指導内容の重点化を図ることが可能になる。年間の指導の一貫性のみならず、学部を跨いだ指導の系統性を持つことが可能になる。また、実態把握に基づく指導目標・指導内容を設定し（「桐が丘L字型構造」の縦軸）、適切な手立て・配慮（「桐が丘L字型構造」の横軸）を踏まえることで、根拠と一貫性のある同単元異目標の指導が可能になる。

今後も毎時の授業の中で、「社会的事象を捉える思考の深まり」の育成を目指した授業実践を継続することで、生徒の力を着実に育てていけるように努力をしていきたい。

参考文献

- 1) 文部科学省（2009）. 高等学校学習指導要領解説 地理歴史編.
- 2) 文部科学省（2009）. 高等学校学習指導要領.
- 3) 文部科学省（2008）. 中学校学習指導要領解説 社会編.

（文責：田中 麻衣）

V. 歴史的分野における検討

地理的分野に引き続き歴史的分野における目標・内容の系統性の整理をするために、小学校及び中学校学習指導要領解説に示されている歴史的分野における目標・内容をカード化し、肢体不自由児の学習の特性を踏まえて指導の系統を表すようにカードを配列し検討をおこなった。

目標・内容のカードを配列するにあたって、地理的分野と同様、教科の系統性を整理するために思考の力に注目し、横軸の検討をした。そして、「社会的事象を捉える思考の深まり」の軸を構成する思考方法として、歴史的分野においても「事象」「比較」「関連」「特色」「社会参画」といった思考の深まりの段階性があると考えた。今後は縦軸の系統性について検討を重ね、肢体不自由児の障害特性も考慮し、系統図の作成を進めていきたい。

(文責：小林 博信)

VI. 今後の展望と課題

本研究では、「地理的分野における指導内容系統図」を用いた社会科地理的分野の指導実践の積み重ねをおこなった。「地理的分野における指導内容系統図」を用いた指導実践の成果として次の2点が挙げられる。

1点目は、①実態把握、②指導目標・指導内容の設定、③指導の工夫、④評価の4つのプロセスで指導を組み立てていくことが可能となった点である。社会科で育てたい力を「社会的な見方・考え方」に焦点化したことで、子どもの思考の力のどこに課題があるのかを把握して指導することができ、効果的な指導目標・指導内容の設定と適切な評価をおこなうことができた。

2点目は、系統性を踏まえた指導が可能となった点である。作成した系統図は、小学校段階～中学校段階において同じ軸を用いている。このため、子どもの思考の力を育てるために一貫した指導をおこなうことができた。

現在、「社会的な見方・考え方」に着目して、「歴史的分野の指導内容系統図」の作成について取り組んでいる。今後は、目標・内容の整理をおこない「歴史的分野の指導内容系統図」を完成させていきたい。また、「歴史的分野の指導内容系統図」を用いた歴史的分野の授業実践も進めていきたいと考えている。

(文責：小林 博信)

参考文献

- 1) 筑波大学附属桐が丘特別支援学校（編）（2016）. 平成 26・27 年度 文部科学省 特別支援教育に関する実践研究充実事業 研究成果報告書 特別支援教育に関する教育課程の編成等についての実践研究 学習に遅れがある肢体不自由児に対する各教科の指導内容の精選・重点化, 指導の工夫に関する研究. 筑波大学附属桐が丘特別支援学校研究紀要, 51. 筑波大学附属桐が丘特別支援学校
- 2) 文部科学省（2008）. 小学校学習指導要領解説, 社会編.
- 3) 文部科学省（2008）. 中学校学習指導要領解説, 社会編.
- 4) 新しい社会編集委員会・東京書籍株式会社編集部（編）（2011）. 新しい社会 3・4 上, 3・4 下, 5, 教師用指導書, 指導編. 東京書籍
- 5) 新しい社会編集委員会・東京書籍株式会社編集部（編）（2012）. 新しい社会地理, 教師用指導書, 指導展開編. 東京書籍
- 6) 澤井陽介（2013）. 小学校社会授業を変える 5 つのフォーカスー「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎」を培うために. 図書文化社
- 7) 田中耕三（1996）. 地名と地図の地理教育ーその指導の歩みと課題ー. 古今書院
- 8) 斑目文雄・小峯勇・尾崎甚八（編著）（1982）. 小学校地図指導の手引きー読図・作図能力を高めるー. 東京書籍
- 9) 村山祐司（編）（2003）. シリーズ〈人文地理学〉10, 21 世紀の地理ー新しい地理教育. 朝倉書店